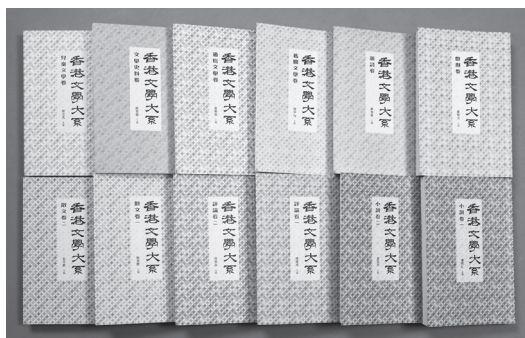


融合の地・香港文学史の構築

——『香港文学大系 1919-1949』を評す

香港：商務印書館／全12巻／2014年7月～2016年7月



黄 英哲

前言

——重層的な歴史のなかの植民都市

香港はこの百年来の中国の分裂した歴史に深く関わってきた都市である。文化的な地理空間からいえば、香港は周縁に位置しているものの、この百年の中国と欧米の文化の変遷や発展を深く刻み込み、中国の清末以来の文化の変転を繰り広げただけでなく、植民主義がもたらした西洋知識の系譜を継承している。この土地では人・文化・政治・思想の越境が不断に繰り返され、それが積み重なって重層的な歴史の記憶を形成し、変動する時代のなかに組み込まれているのである。それはモダンで老邁な、また東洋的で西洋的な様相を呈しており、至るところにその複雑性が表出しており、明らかに香港が百年来の東アジアの歴史の変遷の拡大鏡であることを物語っている。香港作家の也斯はかつて「香港には何の記憶もなく、香港とは記憶喪失の都市である」と述べたことがある。これは、あまりにも多くの歴史の記憶を抱えたこの地

が、急速な現代化による越境や融合の後、現地アイデンティティの喪失に直面したことを語ったものである。

これに鑑み、一九八〇年代から多くの香港人学者——たとえば王宏志・鄭樹森・梁秉鈞(也斯)・黄繼持・盧瑋鑾(小思)・黄維樑・劉以鬯・陳清僑・陳国球が香港文学研究に注目しはじめ、歴史・文化アイデンティティ・イデオロギー・モダニティ・大衆文化といった視点から、何をもって「香港文学」とするのか、さらには「香港文学」の定義について詳細に検討し、その後の香港文学史編纂の基礎を確立したのである。

理論構築のほか、一九九〇年代以降に香港の各大学や学者個人によって続々と整理出版された香港文学に関する史料整理計画は、文学史的内容的な構築を具体的に補完することとなった。これらの史料整理は次の四つの部分に分けられる。まず一つ目は、目録整理である。総目録の整理においては、例えば一九九五年に黄淑嫻らによって編集された『香港文学書目』(香港:青文書屋、一九九六年)

は、五〇年代から九〇年代までに出版された二百冊近くの香港文学の書籍を集録し、作品目録の初歩的な整理を行った。

一九九七年以後に青文書屋が増補出版した『香港文学書目——補充資料』には、一九九五年から一九九七年までの出版目録が加えられている。このほか定期刊行物の目録整理もされており、例えば盧瑋鑾による早期文藝雑誌の出版目録『香港早期(1921-1937)文藝雜誌目録』(香港:香港文学資料蒐集及整理計画、一九九六年)では、定期刊行物の目録のほか、作家や主題別の作品目録、電子目録も作成されており、文学史の内容をさらに具体的なものにしていく。二つ目は、文学年表と年鑑の作成である。この作業は香港文学の歴史的文脈を秩序立てることに貢献しており、主に次の二種類に分けられる。一つは総記の形式による年表であり、この成果として鄭樹森・黄繼持・盧瑋鑾編『香港新文学年表1950-1969』がある。もう一つは、定期刊行物の年表や作家の著作年表であり、これは歴史上の重要な事柄を詳細に記録

し、各年代の全体的な文化的風潮を理解する上で大きく役立った。三つ目は、訪問録・オーラルヒストリー・伝記の筆録である。これは作家の人生を復元し、歴史的背景を掌握する上で十分に貢献しており、とくに大きな歴史的枠組みにおける個人と時代との交錯を証明するものである。四つ目は、資料集の編纂である。

主にそれまで収集した史料をジャンルや主題別に分類して編集し、埋もれていた文献を利用できるようにし、研究者のさらなる探求を可能にした。これに関連する作業は盧瑋鑾によって八〇年代から着手され、一九八三年から続けざまに資料集が出版されており、『香港的憂鬱——文人筆下的香港(1925-1941)』(香港:華風、一九八三年)、『茅盾香港文輯1938-1941』(香港:廣角鏡出版社、一九八四年)といった新文学資料選がある。そのほかにも様々な主題や焦点に基づく資料集が作成されており、関係資料の整理が行われた。²³⁾

香港の学者による史料整理の出版成果のほか、中国の学者が「香港返還」の歴

史的期限を前に、中国文学を母体として香港文化を召還するために執筆した香港文学史の「成果」も重要な参照対象である。植民地となって百年を経た香港の政治主権が再び元の君主に復帰しようとする政治的にデリケートな時期に、中国大陸ではまず謝常青による香港文学史『香港新文学簡史』（廣州・暨南大学出版社、一九九〇年）が出版された。その後も続々と出版され、潘亜暉・汪義生『香港文学概観』（廈門・鷺江出版社、一九九三年）、王劍叢『香港文学史』（南昌・百花洲文藝出版社、一九九五年）、王劍叢『二十世紀香港文学』（濟南・山東教育出版社、一九九六年）、李戦吉『霓虹港湾——香港文化的源與流』（北京・人民文学出版社、一九九七年）、劉登翰『香港文学史』（香港・香港作家出版社、一九九七年）、古遠清『香港当代文学批評史』（武漢・湖北教育出版社、一九九七年）といった著作がある。もちろん二一世紀に入った後も、「返還」が与える正統化によって、香港文学研究は中国研究の枠組みにおける一つの支流となり、

関連する機関によって引き続き関心が寄せられ、研究成果が出版されている。

中国の一九八〇年代における香港研究の出版成果と比べると、「香港返還」前後は香港に関連する出版がピークに達しており、そこからは当時の中国で返還を視野に入れた香港ブームが巻き起こったことが窺える。その中で最も重要であるのは、もちろん政治的要素の介入である。香港社会に溢れる植民地情緒、西洋化の色彩や英語・広東語の入り混じった言語情況により、返還後に中国との間で必ずや隔絶と不適合が生じることは運命づけられており、それが故に香港文化の整理作業が返還前夜の最も重要な任務となったのである。まさに王宏志が以下のように指摘する通りである。「中国大陸では、現代文学史の叙述、教育や史書の編纂は重要な政治的任務と意義を担っており、その理由はそれらが国家の政権の構築と密接に関係していることにある。いわゆる『国家と叙述』(nation and narration)の問題である³⁾。どの国家の文学史の叙述であつても、国家の叙述の

構造から脱却できず、それはまさに文学史が備える政治的、教育的意味によるものである。このため香港文学史の執筆過程は他の東アジア各地と比べてみると、明らかにより複雑に絡み合ったものになつている。香港現地の学者が急いで自身の地域の文学史料を補充し内部構築しようとしたとき、中国の学者が香港文学史の執筆を試み、それを中国の国家論述の枠組みに取り込もうとしたのであり、それが故に文学の本源を整理し、とくに左翼の文脈における香港文学に叙述を補足したのである。またこうした文学史の再編の過程において、香港がこの百年に繰り広げてきた流動性や国際性を盛り込む意図をも明らかにした。まさに香港の歴史・文化は複雑で、広汎な範囲にわたることから、香港文学とは何かを探索するとき、豊富に取り揃えられた文学作品の収集整理がまさにこの過程に必須であった。そして香港文学史が執筆され始めて三〇年がたった二〇〇九年、香港教育学院人文学院院长、文学及文化系講座教授、中国文学文化研究中心主任であ

る陳国球教授が総主編を担当し、香港自身の観点に立った初めての『香港文学大系1919-1949』の編纂作業が始められた(以下、『大系』と呼ぶ)。この『大系』一二巻は、七年の歳月をかけて二〇一六年に完成し、香港の重層的な歴史的文脈における文学イメージを多方面から記録し、こうした植民都市の文化世相を外界からも窺い知れるようにしたのである。

中国文学史の複線

——大分裂以前(1919-1949)

前述の陳国球教授の総主編による『大系』は、香港商務印書館から出版されており、その編集委員会のメンバーは副総主編の陳智徳のほか危令敦・黄子平・黄仲鳴・樊善標であり、みな香港の大学の研究者である。この『大系』全一二巻の構成は以下のとおり。

- 「新詩巻」(全一冊、陳智徳主編)
- 「散文巻」(全二冊、樊善標・危令敦が各冊の主編を担当)
- 「小説巻」(全二冊、謝曉虹・黄念欣が

各冊の主編を担当)

- 「戲劇巻」(全一冊、盧偉力主編)
- 「評論巻」(全二冊、陳国球・林曼叔が各冊の主編を担当)

- 「旧体文学巻」(全一冊、程中山主編)
- 「通俗文学巻」(全一冊、黄仲鳴主編)
- 「児童文学巻」(全一冊、霍玉英主編)
- 「文学史料巻」(全一冊、陳智徳主編)

各巻の巻頭には各主編による編集理念についての周到な説明があり、その文学ジャンルの変遷や香港文学史における位置について詳細に述べており、読者に明確な読解の方向性を与えている。全体の構成から言えば、この『大系』は香港文化の様相全体を立体的に示しているだけでなく、同時に各巻が独自に各文学ジャンルの支柱を受け持っている。この膨大な作業の完成は、香港文学探求の重要な成果といえよう。

総主編の陳国球はこの『大系』の総序において、「早期に香港以外で出版された、各種の香港文学史は遺漏が実にかつたため、香港文藝界はまず香港文学

に関する資料を系統立てて整理し、その上で香港文学のための文学史を編修しようという考えを持つようになった」と述べている。これは香港学者と中国学者の香港文学に対する着眼点の違いを物語っている。まさに黄継持が言う、「學術については、急ぐことはできない。まず基礎的な作業を行う必要がある。史料と歴史観、文学資料と文学理解は、互いに補いながら成り立つのである。史実は一致しても、史論は相異なる。文学史は一般の歴史に比べて、さらに幾重にも重なる解釈の空間があり、そのため一義に帰したり、政府が定本を編纂すべきではない」のである。この『大系』の出版は、まさに香港文学の多元的な素材を収集整理した基礎的な成果であり、その詳細な「凡例」の説明や、毎巻の巻頭に附された「導言」(解説)、雑誌書影や画像は、みな国内外の多くの学者の参考や利用に役立つものである。これにより香港文学が越境のなかでどのように歴史を伝承し世相の変転を経験してきたか、その脈絡関係をさらに掘り下げて解釈するこ

とが可能になったのである。

この『大系』における資料収録の対象時期は一九一九年から一九四九年までに設定されており、三〇年間の文学作品が収集整理されている。この二つの歴史的時点は中国文化や政治における大変動の時期であり、このため『大系』は明らかにもう一つの意義を持っている。広く知られているように、一九一九年の「五四」運動は中国現代文学の起源である。「五四」に伴って起きた新文化運動により民主や科学といった近代思想が萌芽しただけでなく、中国文学にも空前の衝撃がもたらされ、従来主導的な位置にあった旧文体が白話体の新文学に取って代わられ、しだいに文学の周縁になり下がった。『大系』がこの一九一九年を起点にしたことは、中国新文学の発展史の歴史的文脈を継承したということである。そして同時に、当時にあつて化外の域であつた香港が中国文学の越境により、中国文学のもう一つの展開の場として文学史の複線的な視点となり、まさに中国国内の白話文学作品と相互の参照や対話が

可能であることを示している。これについては、総主編の陳国球も明言しており、この『大系』の時間設定は文化の根源追究を考慮したものであり、香港現代文化の変遷の起源は「五四」にあるのだという。ただし北京から香港への文化伝播の時差を考慮し、もう一つの時間の境界を一九四九年としたとしている。この時代区分は、歴史的に言えば中華人民共和国の成立である。ただし同時に台湾が日本の植民地支配から解放され、国民党の蔣介石政権の敗北により正式に中華民国による反共の砦となった時点でもある。香港はイギリス植民地として二つの地域を媒介する地として、左翼・右翼いづれのイデオロギーをもつ文人の言論をも受け入れ、香港返還に至るまで「両岸三地」の鼎立状態を形成したのである。

『大系』の編集構成や形式が参考にしたのは、趙家璧主編の『中国新文学大系』である。まさに『中国新文学大系』の「総序」や「導言」は、「五四」の文学大家たち——蔡元培・胡適・鄭振鐸・魯迅・茅盾・鄭伯奇・朱自清・周作人・郁

達夫・洪深らによって執筆されており、この大系を権威あるものにしていく。しかし『大系』は『中国新文学大系』編集の経験を取り入れただけでなく、さらに香港文学の雑種性をも考慮し、新文学に限定することなく、さらに旧文学や通俗文学、児童文学といった文学ジャンルをもこの文学大系に組み入れており、香港文学の多元的で豊富な側面を効果的に体现している。これもまさにこの文学大系が注目される所以である。中国新文学の基本的な文体については、主に「新詩巻」「散文巻」「小説巻」「戲劇巻」「評論巻」に体现されており、これらの文学ジャンルの収集整理は中国新文学の発展と完全に連携している。ただし中国と全く異なる様相も見せており、最も特殊な点は様々なイデオロギーの作品を同時に包括したことである。こうした風格の違いはこの地域に広く流布しており、これにより一種の比較対照の視点を形成している。この『大系』が中国文学大系と異なる複線的な視点を有しているのは、主に香港の地理的空間の媒介的な立場によ

る。メディアの発達や中国と欧米の文化が融合した文化的体質により、香港は歴史的大事件のなかで往来する文人たちの歴史的な避難所となり、その混沌とした文化現象を形成したのである。一九一九年から一九四九年まで、香港の新聞副刊や文学雑誌は文化を媒介し伝播する重要な役割を演じた。例えば『大光報』『大光文藝』『循環日報』『燈塔』『大同日報』『大同世界』『南強日報』『過渡』『英華青年』『小説星期刊』『双声』『文学研究録』『伴侶』『鉄馬』『激流』『南風』『時代風景』といった刊行物が一九二〇〜三〇年代の香港文藝を担ったのである。このほか『大系』の作品編成からも、文学から歴史を読み解こうとする意図が窺える。早期文学の文語から白話へと移行する文体革命から一九三七年に日中戦争が勃発するに至り、中国大陸から南下した文化人による抗戦文学を大量に収録している。ひいては太平洋戦争中の日本占領期や戦後に至るまでの作品を採録したのである。『大系』は作品選択において左翼だけでなく、反

戦や和平といった他の立場に立った作品も包括しており、ここからは香港の媒介的立場の特色を見出すことができる。戦争期の作品選択については、『大系』は政治的主観の主導を避け、できるだけ客観的に作品自身が表現する時代の複雑性を復元し、効果的に読者をその「閲読の場」に立ち戻らせている。一九三七〜一九四一年を抗戦期の文学区分と見なすなら、『大系』はさらに日本による占領や光復、ないしは国共内戦後の一九四九年といった歴史的大分裂を記録している。それぞれ収録された文章は読者を歴史に回帰させ、それが結集して香港文学史の全体像を作り上げており、中国文学史との対照効果を生みだしている。

『大系』の編者たちは、先行する研究者の資料研究の成果を参照するほか、自身もその導言において作品選択の基準について述べており、また各文学ジャンルの変遷や発展史について煩を厭わず説明している。そうすることにより、このよ

うな大作の文学大系の各選集間における相互の対話を可能にし、さらにひとつの

文学史の枠組みを形成している。各文章が時代とテキストを構成しており、これを通じて読者が各作品から時代を再考すよう促しているのである。

香港——都市のアイデンティティと現地的視点

『大系』は中国文学史の発展の脈絡を継承しているが、現段階の中国大陸で出版された香港文学選集や文学史との最も大きな違いは、現地の視点を備えていることである。その編集の立場は「凡例」から明確に知ることができる。現在にいたるまで、文学の範疇は常に基本的な文

体の討論に限られており、そのため文学大系が収集整理されて出版される際には、編纂者の視点は往々にして純文学に止まっていた。そして必要とされるのは新文学作品の収集整理であり、純文学と同時に存在していた通俗文学や旧体文学、児童文学は見過ごされてきた。これに対し『大系』は、このような文学ジャンルの制約を打破し、さらに大きく香港文化全体に着目し、様々な越境のもの

地域的特色を存分に明らかにしたのである。

前述したように、『大系』の編者たちはみな香港という都市文化空間の構造を理解している専門家であり、そのため『大系』を新文学に限定しなかった。そして香港の地域性を考慮し、香港の読者たちの概況を熟知しているため、このほかに「旧体文学巻」「通俗文学巻」「児童文学巻」を設けたのである。「総序」は次のように言っている。『大系』のなかで「香港」は、文学と文化空間の概念であり、「香港文学」はこの文化空間と共同関係を形成している文学である。香港は文化空間として、別の文化環境では許容されないであろう文学内容（例えば政治理念）や形式（例えば前衛的な試み）を受け入れ、あるいは文学観やテキストの伝播や流通（内地・台湾・南洋・その他の華語語系文学、ひいては異なる言語の文学にまで影響を与え、同時にこれら異なる領域の文学の影響を受ける）を促進するに足るのである^①。ここから分かるのは、『大系』の編者が香港の現地ア

イデンティティに立脚するだけでなく、同時に香港が文化空間として担っている複雑性や雑種性を認識しており、そのために香港文学の定義に新しい解釈を与えていることである。すなわち香港文学が持つ転化の視点である。文体やイデオロギーといった文学形式、内容の実験性を許容するだけでなく、これらの多元的な文学を伝播する基地でもあり、受容と影響という二大要素を備えているのである。香港文学のほか、東アジアにはこのように鮮明な文化空間の特色をもつ地域文学は存在しておらず、『大系』の出版はこの複雑で豊富な文化空間を行間に浮かび上がらせているといえる。

『大系』において最もよく香港の現地色を体現した作品は主に「通俗文学巻」に集中しており、これは『大系』のなかで最も早く完成した選集の一つである。同年に出版した選集には「散文巻」「旧体文学巻」「児童文学巻」がある。香港文学の流動や媒介はその多くが新聞雑誌による伝播に頼っており、また都市の急速な発展による変化に呼応しており、通

俗文学ジャンルは都市において最も早く、最も容易に一般読者の大衆に受容される作品といえる。その親近感や独特な娯楽効果により、この文学ジャンルは広く歓迎されており、しかも香港人の姿や香港の東西文化が渾然一体となった都市の様相を生き生きと映し出している。読者の需要のもと、香港の通俗文学の数はすべてのジャンルで首位を占めており、それはもちろんん玉石混交であり、膨大な数の作品から代表的な作品を精選する必要があった。『大系』の「通俗文学巻」の編者である黄仲鳴は、王韜・鄭貫公・黄崑崙・孫受匡・羅澧銘・何恭第・吳灞陵・黃守一・何筱仙・黃言情・黃天石・齋公・豹翁・鄭羽公・王香琴・侯曜・周白蘋・望雲・靈蕭生・周天業・林藩・高雄・我是山人・司空明・仇章・筆聊生・怡紅生・李我といった作家の作品を収録している。紙幅のために抄録したものや、存目だけのものもあるが、早期の通俗文学の大まかな輪郭を生き生きと描きだしている。

通俗文学が人を魅了するのは、社会に

残存する豊富な文学の養分を吸収している点にある。香港は様々な人々が雑居していることから、通俗文学には一九四九年以前の社会言語が大量に残されている。それには古文・白話文・広東語、ひいてはこれらの言語が入り混じった「三及第一」という文体が含まれており、ここからは通俗文学作家たちの地域的色彩を見出すことができる。「通俗文学卷」の目次を見てみると、編者が作品配列によつて香港での通俗文学の変遷や伝播の概況を表現していることが分かる。たとえば、早期の伝統的通俗文体を留めている筆記・粵謳・班本・龍舟・戯曲といった創作形式を採録している。また同時に香港の通俗文学の内容的な革新が、既存の文体形式に新しい内容と時代性を注入しており、これにより時代と共に発展し大衆からの愛顧を得られたのだということを示唆している。全体的に言えば、「通俗文学卷」から「旧体文学卷」「散文卷」「小説卷」「戯劇卷」までを相互に参照することにより、「香港」的要素の各文学ジャンル間の越境や合流を見出すこ

とができる。『大系』の各選集が明らかにする香港イメージは、あたかもそれぞれ独立した都市の縮図のようであるが、その縮図を寄せ集めれば大香港の一枚の浮世絵になるのである。「香港返還」の後、香港は政治的には中国に帰属し、植民地支配から脱却した現在、華語語系文学に欠くことのできない支流となった。『大系』の出版により、香港文学の定義は言わずとも明らかである。香港文学の内包するものも日増しに充実し、これらの文学作品は香港の高度消費文化の洗礼のもと、この都市の歴史を鮮明に刻印している。

小結

この『大系』全一二巻は二〇〇九年に編集作業が始められ、二〇一四年に最初の選集が、そして二〇一六年にはすべての巻が出版された。二〇一六年二月には香港商務印書館から「導言集」が出版されており、これは各選集の巻頭に附された導言を一冊にまとめ、読者の利便をはかったものである。また同時に様々な読

者たちに読解の手がかりを提供し、読者たちを「香港文学」にうまく導き、さらに「史」の構築を行っている。縦方向の中国文学史の伝統を継承するだけでなく、形式や内容では西洋の文学批評の養分を取り入れ、香港文学の独自性を鮮明に示し、自身の重層的な歴史的経験と呼応させている。この『大系』全一二巻は、「香港」現地の文化構築の一環とみなすべきであり、同時に香港が自身の歴史や文化、未来を再考した最初の成果である。近い将来に第二輯、第三輯の『大系』が出版され、この第一輯の基礎のもと、忘れられた文学／史を新たに復元、構築していくものと信じている。

注

- 〈1〉 也斯「記憶的城市・虚構的城市」香港：牛津大学出版社，一九九三年，三五頁。
- 〈2〉 香港史料整理目録の具体的な編目については、陳智徳「今日香港文学研究引介——史料、選本與評論」(梁秉鈞・陳智徳・鄭政恆編『香港文学的傳承與轉化』香港：匯智出版，二〇一一年)を参照。

〔3〕 王宏志・李小良・陳清僑『否想香港——歷史・文化・未來』台北・麦田出版、一九九七年、九八―九九頁。

〔4〕 陳国球「香港？香港文学？『香港文学大系一九一九至一九四九』（『香港文学大系』導言集、香港・商務印書館、二〇一六年初版、一頁）を参照。

〔5〕 黄繼持「關於「為香港文学写史」引起的随想」（黄繼持・盧瑋鑾・鄭樹森『追跡香港文学』香港・牛津大学出版社、一九九八年、九〇頁）を参照。

〔6〕 総主編の陳国球は「総序」において編集時期の境界に対し、次のように説明している。「一九一九年」と「一九四九年」という二つの時間指標を設定し、『大系』第一輯の上限と下限とし、起点を整理する試みを行った。以後、第二輯、第三輯……と、流れに従って時代を下り、その他の時代に対する考察を進めていきたい」（同注〔4〕、二三頁）。

〔7〕 同右、二五頁。